

**主題 自己の生き方と向き合い続ける子供を育てる道徳科学習指導**

副主題 自分と比較, 統合する対話活動の連続を通して

うきは市立大石小学校  
教諭 鶴田 圭祐

こんな手立てによって…

「見つめる段階」「推しはかる段階」  
「あたためる段階」の各段階に「自分  
と比較, 統合する対話活動」を位置付  
けたことによって,

こんな成果があった!

「これまでの自分」「ありうる自分」  
「ありたい自分」を見だし, 自己の  
生き方と向き合い続ける子供を育てる  
ことができた。

### 1 考えた

本研究では, 自己の生き方と向き合い続けるために, これまでの自分と照らし合わせて道徳的価値の意味や大切さについて社会や他者, 自分との関わりで理解を深め, その実現に向けての道徳的実践力を発揮することができる子供を目指した。そのために, 自分と比較, 統合する対話活動の連続である「自分と比較, 統合する対話活動①」→「自分と比較, 統合する対話活動②」→「自分と比較, 統合する対話活動③」の三つの活動を位置付けることを考えた。そして, その活動が生きる授業づくりの構想を, 「子供の感じ方・考え方の傾向を把握する手法の具体化」「対話活動を位置付けた学習過程の最適化」「感じ方・考え方の自覚を促す表現活動の工夫と支援」の3点から具体化することを考えた。さらには, 事前アンケートを基にした「これまでの自分」を根拠に「ありたい自分」を志向する有効性を検証する手だてを工夫した。

### 2 やってみた

「自分と比較, 統合する対話活動の連続」を機能させる授業づくりの有効性を, 実践1-第5学年 B-2:教材「あいさつ運動」, 実践2-第5学年 C-15:教材「家族のために」を通して検証した。実践1では, 「子供の感じ方・考え方の傾向を把握する手法の具体化」の有効性を検証することができた。そして, 実践1で明らかになった「なぜ, ありたい自分を志向するのかという根拠をもつまでには至っていない」という課題を改善するために, 事前アンケートの活用という新たな構想に基づいた実践2からは, 「対話活動を位置付けた学習過程の最適化」「感じ方・考え方の自覚を促す表現活動の工夫と支援」が有効であることを明らかにすることができた。

### 3 成果があった!

自己の生き方と向き合い続ける子供を育てるプロセスにおいて重視した以下の姿が見られた。

- ・これまでの自分とその背景にある感じ方・考え方を理解する姿
- ・登場人物や友だちの感じ方・考え方を受け入れ, 多様な考えから道徳的価値を考える姿
- ・ありたい自分について考え, よりよい生き方の実現に思いを向けた姿

**主題 自己の生き方と向き合い続ける子供を育てる道徳科学習指導**

副主題 自分と比較, 統合する対話活動の連続を通して

1	主題設定の理由	3
	(1) 道徳教育への期待から	3
	(2) 道徳教育の動向から	4
	(3) 子供の実態とこれまでの指導の反省から	4
2	主題の意味	5
	(1) 主題について	
	① 自己の生き方とは	5
	② 自己の生き方と向き合い続けるとは	5
	③ 自己の生き方と向き合い続ける子供とは	6
	(2) 副主題について	
	① 自分と比較, 統合するとは	7
	② 自分と比較, 統合する対話活動の連続とは	7
3	研究の目標	9
4	研究の仮説	9
5	研究の構想	9
	(1) 子供の感じ方・考え方の傾向を把握する手法の具体化	9
	(2) 対話活動を位置付けた学習過程の最適化	10
	(3) 感じ方・考え方の自覚を促す表現活動の工夫と支援	10
	(4) 実践検証の進め方について	12
6	研究の実際	12
	(1) 実践1 主題「あいさつの心」B-2	12
	(2) 実践2 主題「家族の一員として」C-15	18
7	研究のまとめ	23
	(1) 研究の成果	24
	(2) 今後の課題	25
	<参考文献>	25

# 主題 自己の生き方と向き合い続ける子供を育てる道徳科学習指導

副主題 自分と比較, 統合する対話活動の連続を通して

うきは市立大石小学校  
教諭 靄田 圭祐

## 1 主題設定の理由

### (1) 道徳教育への期待から

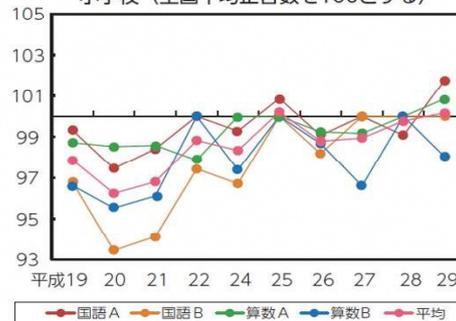
福岡県では、平成30年度に「福岡県青少年健全育成総合計画（福岡県青少年プラン）」を策定して、相手のことを尊重し互いの多様性を認め、思いやりの心を持って社会的な自立を果たせるような「豊かな心と志を持つたくましい青少年」の育成を目指している。計画に示された13の基本目標の一つが「豊かな心の醸成」であり、施策の(1)に「道徳性を養う心の教育の充実」をあげている。その背景には、資料1\*に示す本県の小学生に関する現状がある。

- ・学力については、全国学力・学習状況調査における標準化得点が上昇傾向にあり、全国平均に迫っている。
- ・体力については、全国体力・運動能力、運動習慣等調査における体力合計点平均値が平成29年度には全国平均を上回っている。
- ・本県のいじめ認知件数は、全国平均と比べると低いが、今後減少に転じる傾向にはない。

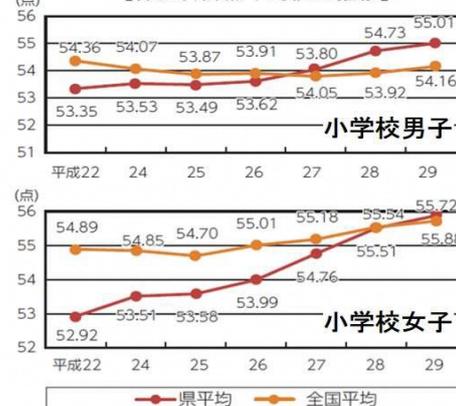
学力や体力に比べて、豊かな心に関してはさらなる改善が必要であるということである。このような本県の小学生の現状から、自他を尊重し、命を大切にしようとする道徳性を育む教育の充実は喫緊の課題だと考える。ここに、感じ方や考え方を働かせながら自分自身の行いを個別性や関係性の観点から吟味し、調和のとれた生き方を追求する子供の育成を目指す本研究の意義を見いだすことができる。

※ 福岡県青少年健全育成総合計画（福岡県青少年プラン）平成30年3月 p18・19より引用

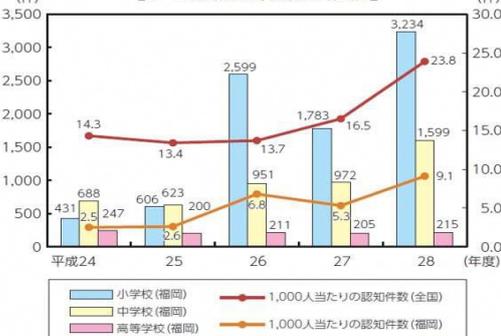
【全国学力・学習状況調査 標準化得点の推移】  
小学校（全国平均正答数を100とする）



【体力合計点平均値の推移】



【いじめ認知件数の推移】



資料1：本県の小学生に関する現状

## (2) 道德教育の動向から

平成29年7月に公表された『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道德編』には、道德科の目標が以下のように示されている。

第1章総則の第1の2の(2)に示す道德教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道德性を養うため、道德的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道德的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

ここで注目したいのは、「道德的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して」という一文である。この一文には、これまでの道德の時間における以下の課題を改善して、真に道德的実践力を育む道德科を目指すというメッセージが込められていると考える。

- ・「前も同じことを学習した」「それは、もう知っている」という意識を子供にもたせている。
- ・指導方法が、読み物に登場する人物の心情を理解させることなどの型にはまりがちである。

このことを踏まえて、「多面的・多角的な見方へと発展させているか」「道德的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」という観点から学習状況を評価することとなった。

以上のことから、これまでの自分のよさや不十分さを理解した上で、ありたい自分について考え、よりよい生き方の実現に思いを向かせる指導方法を明らかにしようとする本研究は、学習指導要領が目指す道德教育の具現化を図る上で意義深いといえる。

## (3) 子供の実態とこれまでの指導の反省から

本研究に取り組む前の学級の児童(第5学年25名)の実態について、4件法による自己評価アンケート(3.0以上が育ちの目安)で調べてみた。

資料2に示すとおり、三つの資質・能力の平均スコアは3.0を下回っており、よりよく生きるための基盤となる道德性が十分には育っていないことが明らかとなった。特に、多面的な見方をすることや自分の生き方を考えることに関する項目が低かった。

知識及び技能	自分の経験から、考えや思いをノートに表現することができましたか。	3.2
	友達と話す中で、自分の考えを広げることができましたか。	2.6
思考力、判断力、表現力等	見つけた大切な心を、これからの生き方につなげていこうと思えましたか。	2.4
	これまでの自分の経験と比べながら考えることができましたか。	2.4
学びに向かう力、人間性等	登場人物や友達の考えのよさに気づくことができましたか。	3.1
	これまでの自分を見直し、学んだことを自分の生き方にいかそうと思うことができましたか。	2.7
学びに向かう力、人間性等	学習のめあてを自分で考えることができましたか。	3.2
	友達の考えを聞いたり、自分の考えを伝えたりすることができましたか。	3.1
	これからの自分について友達に伝えることができましたか。	2.4

資料2：実践に取り組む前の子供の実態

以上のような子供の実態を、これまでの指導方法と関連付けて考察すると、以下に示す指導上の課題が明らかになった。

- これまでも「書く活動」を重視して、自分なりの感じ方や考え方を表出することはできていたが、感じ方や考え方を交流する手立てを工夫していなかったため、感じ方や考え方が多面化し、道德的な価値を理解することが十分にはできていなかった。
- 学んだ道德的な価値に関わる自分を振り返ったり、これからの自分を想像したりする活動を具体化することができていなかったため、自分自身のことを深く見つめることができず、根拠をもって生き方を考えるまでには至らなかった。

そこで、本研究では、感じ方や考え方を教材に登場する人物や友達と比較して、見直したり新たにしたりする活動、よりよい生き方を実践している自分をイメージする活動をよりよい生き方を追求する過程に位置付け、自己の生き方と向き合い続ける子供を育てることを重視する。

2 主題の意味 —自己の生き方と向き合い続ける子供を育てる道徳科学習指導—

(1) 主題について

① 自己の生き方とは

自己の生き方とは、対象との関わりの中で育つ道徳的な見方や感じ方、考え方に支えられた行い方のことである。

人は日常生活の中で様々な対象と関わりながら生きている。それは家族や友達とであったり、所属する集団や社会であったり、自分たちを取り巻く自然そのものであったりする。また、将来の自分について考えるとき、これまでの自分はどうかを俯瞰して自分自身とも関わって生きているといえる(図1)。

- ・考え方は、物事に対してどのように行動することがよいものであるかを判断するときの思考の傾向である。
- ・感じ方とは、物事から発せられる善悪や快・不快、美醜や正邪につながるものを捉える感覚である。  
例えば、困った人を見かけた時に「助けたいな。」  
「見過ごしたらすっきりしないな。」といった内面的なはたらきのことである。

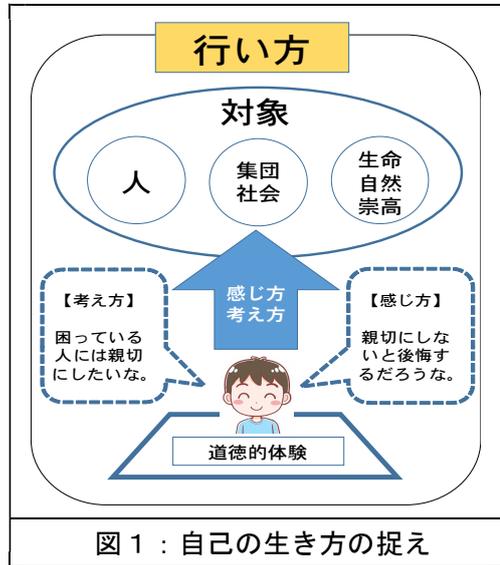


図1：自己の生き方の捉え

② 自己の生き方と向き合い続けるとは

自己の生き方と向き合い続けるとは、道徳的価値の大切さや実現の難しさ、多様さについて理解したり、その価値を基に自分を見つめ直したりすることで、よりよい生き方に迫り、実践しようとする事である。

自己の生き方と向き合うとき、よりよい生き方と照らし合わせて考えることが大切である。

- ・よりよい生き方とは、「自分も相手も社会もよし」といった個別性と関係性の調和のとれた生き方のことである。
- ・照らし合わせて考えるとは、多様にした感じ方・考え方をもとに、自分自身の行いを個別性や関係性の観点から吟味し、調和のとれた生き方を見いだすことである。

このことから、小学校学習指導要領解説道徳科編で示された人間理解、他者理解、価値理解の3つの点を重視することが大事である。

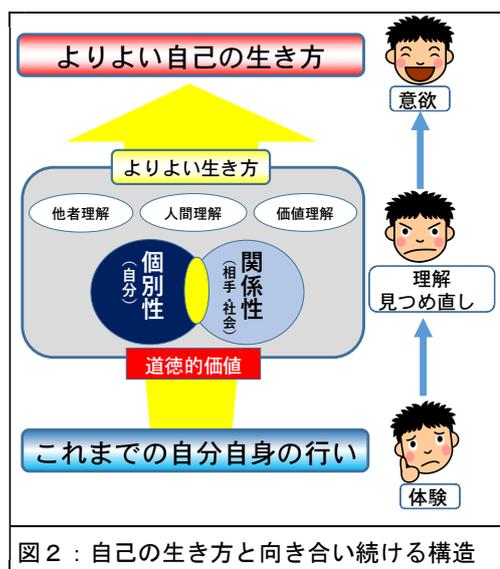


図2：自己の生き方と向き合い続ける構造

- ・人間理解：道徳的価値は大切であると分かっているにもかかわらず、価値に基づく行為を行うことができない人間の弱さや脆さを乗り越えないといけないことが分かることである。
- ・他者理解：道徳的価値を実現したり、実現できなかつたりした場合の感じ方や考え方を一面的ではなく多面的に理解することである。

・価値理解：その行為が自分だけでなく、相手にとっても社会にとってもよいことであるといった、生きる上で大切な道徳的価値が分かることである。

しかし、これまでの自分を見つめ直したとき、道徳的価値の理解が不十分であったり、自己の内面で十分に自覚されていなかったりする課題もある。自己の生き方と向き合い続けるとは、これらのことを受け入れ、「自分ごと」として捉えながら様々な道徳的諸価値の意味や大切さを理解し、これからのよりよい自己の生き方を主体的に求めていくことである（図2）。

### ③ 自己の生き方と向き合い続ける子供とは

自己の生き方と向き合い続ける子供とは、これまでの自分と照らし合わせて道徳的価値の意味や大切さについて社会や他者、自分との関わりで理解を深め、その実現に向けての道徳的実践力を発揮しようとする子供のことである。

自己の生き方と向き合い続ける子供の姿を過程像で捉えると図3に示すように考える。

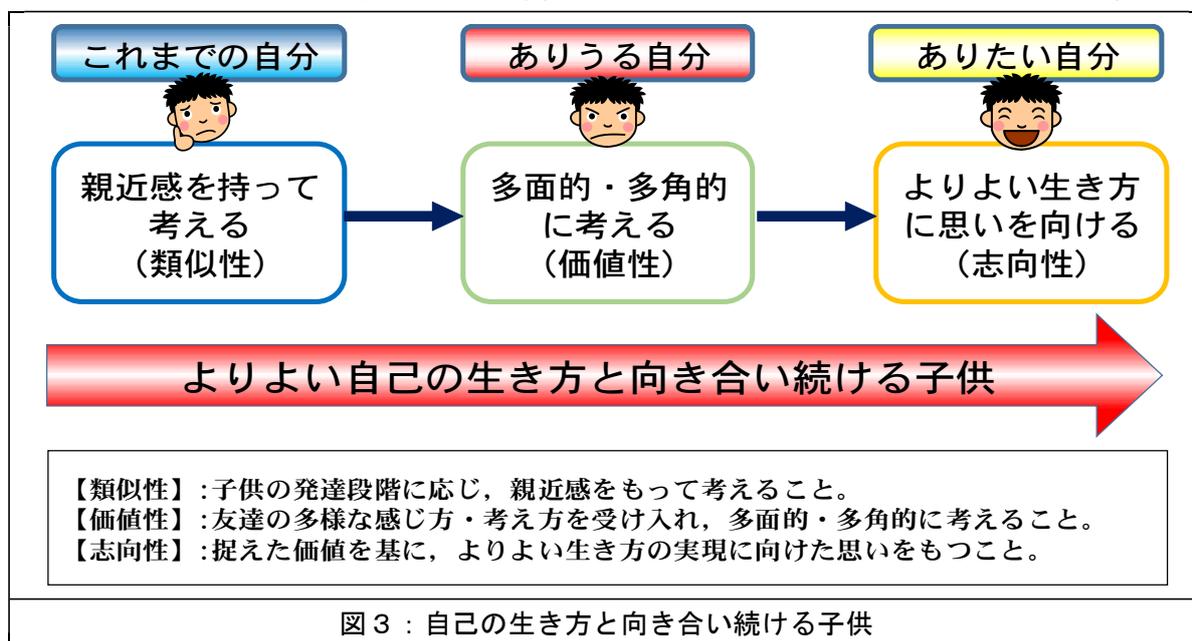


図3：自己の生き方と向き合い続ける子供

図3に示す三つの活動を重視することが、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める」という道徳的な感じ方・考え方をはたらかせることにつながっている。このことから、自己の生き方と向き合い続ける子供の姿を道徳科で育む道徳性との関連から、図4に示す資質・能力で捉えることができる。

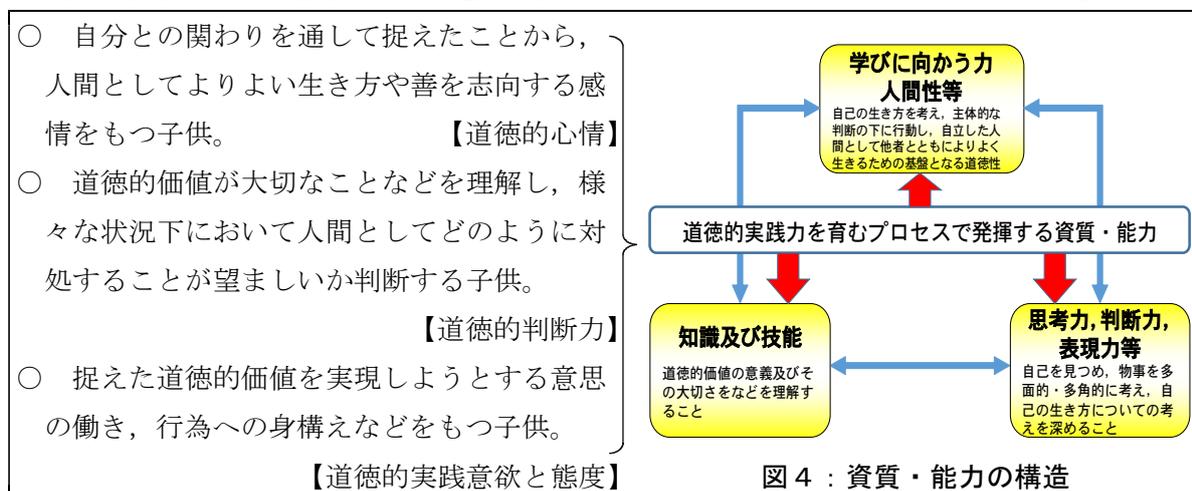


図4：資質・能力の構造

(2) 副主題について —自分と比較, 統合する対話活動の連続を通して—

① 自分と比較, 統合するとは

自分と比較, 統合するとは, 教材の人物や友達の感じ方・考え方の傾向性を自分と比べたり, 道徳的価値に対する自分の感じ方・考え方を見直し, 新たにしたりすることである。

人は比較することで, 物事の本当の価値を理解することができる。それは, 教材の人物や友達の行為の背景にある感じ方・考え方と自分の感じ方・考え方を比べることにより, それらの類似点や差異点が明らかになり, 物事の特徴が見えてくるからである。また, 比較することで見いだした物事の特徴を, よりよい生き方と照らし合わせて考えることで道徳的価値を明らかにし, 自分の感じ方・考え方を見直したり新たにしたりすることができる(図5)。すなわち, 「これまでの自分」, 「ありうる自分」, 「ありたい自分」を意識することになるのである。

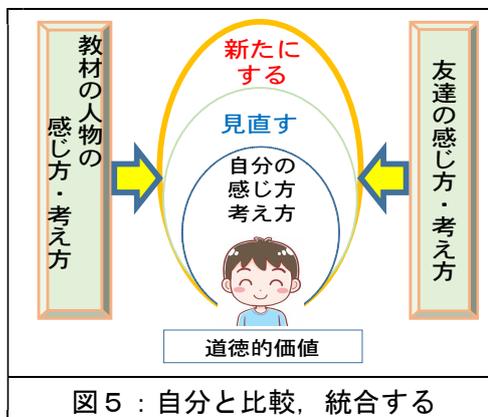


図5：自分と比較, 統合する

② 自分と比較, 統合する対話活動の連続とは

自分と比較, 統合する対話活動の連続とは, 自分なりの感じ方・考え方を見直したり新たにしたりするために, 問題意識をもち, 多様な考え方を基に道徳的価値について考え, よりよい生き方に思いを向けることを目的とする一連の表現活動のことである。

本研究における対話に関しては, 自分や他者や教材とやり取りをすることが必要であり, 本研究では以下のような機能をもつと考える。

- ・自分になかった感じ方・考え方に気付かせる機能
- ・新たに見いだした感じ方・考え方を自己の実践に生かそうとする心情を耕す機能

このことから, 自分と比較, 統合する対話活動を表1に示すように連続させることによって, 自己の生き方と向き合い続けることが可能になるのである。図6は, 「自分と比較, 統合する対話活動の連続」の具体例である。

表1：「自分と比較, 統合する対話活動」の目的, 内容, 方法

	〈 比較, 統合する対話活動① 〉	〈 比較, 統合する対話活動② 〉	〈 比較, 統合する対話活動③ 〉
目的	これまでの自分とその背景にある感じ方・考え方を理解させるために	登場人物や友達の感じ方・考え方を受け入れ, 多様な考え方から道徳的価値を考えるために	ありたい自分について考え, よりよい生き方の実現に思いを向けるために
内容	・物事に対するこれまでの自分について考え, 比べる。 ・課題を共有, 明確にする。	・なぜよいかを多面的・多角的に考えたり説明したりする。 ・考える視点を明確にする。	・捉えた道徳的価値と自分の生き方を比べ, 見つめ直す。 ・よりよい生き方を展望する。
方法	・物事に対する素直な自分の判断とその根拠を考える。 ・自他の判断とその根拠を出し合い, 全体で共有する。	・よさを合わせて道徳的価値の内容を明らかにする。 ・時間的視点や空間的視点から価値を吟味する。	・自分のよさや不十分さを意識させる場を設定する。 ・よりよい生き方についての思いを考え, 共有する。

ねらい：生活リズムを整えることで気持ちよく生活し続けることができる大切さを理解することができる。

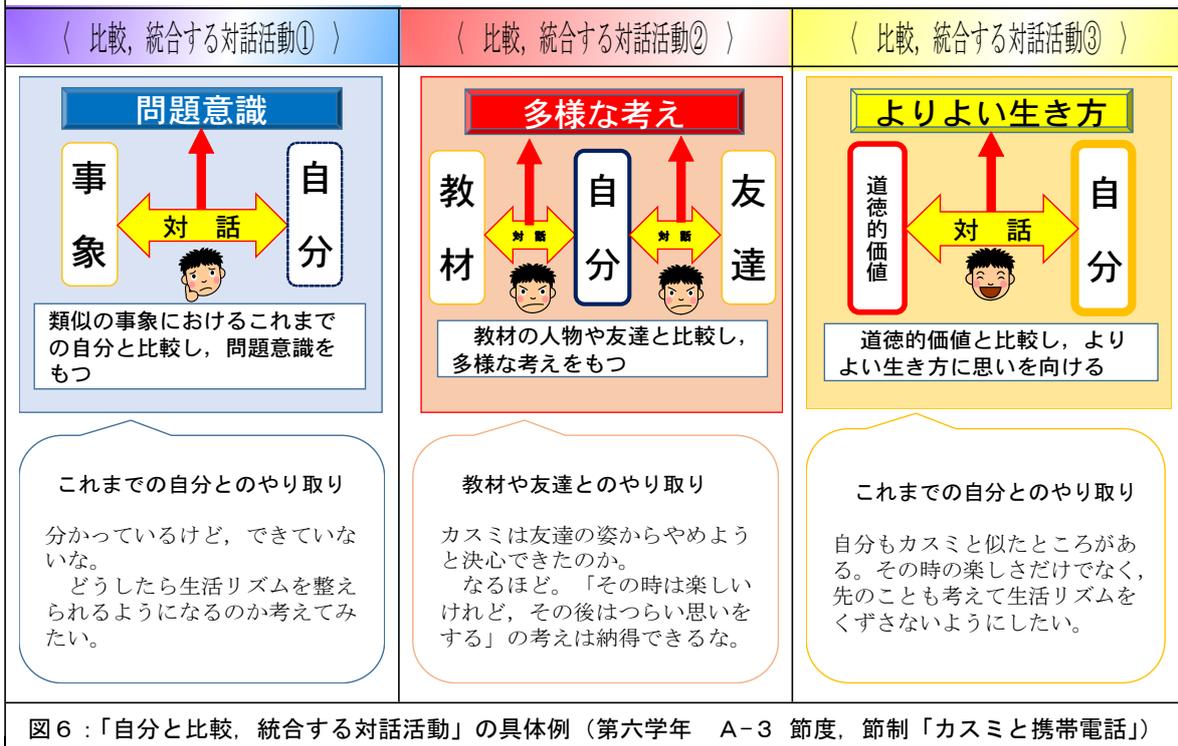


図6：「自分と比較, 統合する対話活動」の具体例（第六学年 A-3 節度, 節制「カスミと携帯電話」）

本研究では、学習過程を自己の生き方と向き合い続ける子供と対応した、「見つめる」「推しはかる」「あたためる」の三段階で構成し、「見つめる段階」に「比較, 統合する対話活動①」, 「推しはかる段階」に「比較, 統合する対話活動②」, 「あたためる段階」に「比較, 統合する対話活動③」を位置付ける。このことを基に主題と副主題の関係を図に表すと以下のようなになる(図7)。

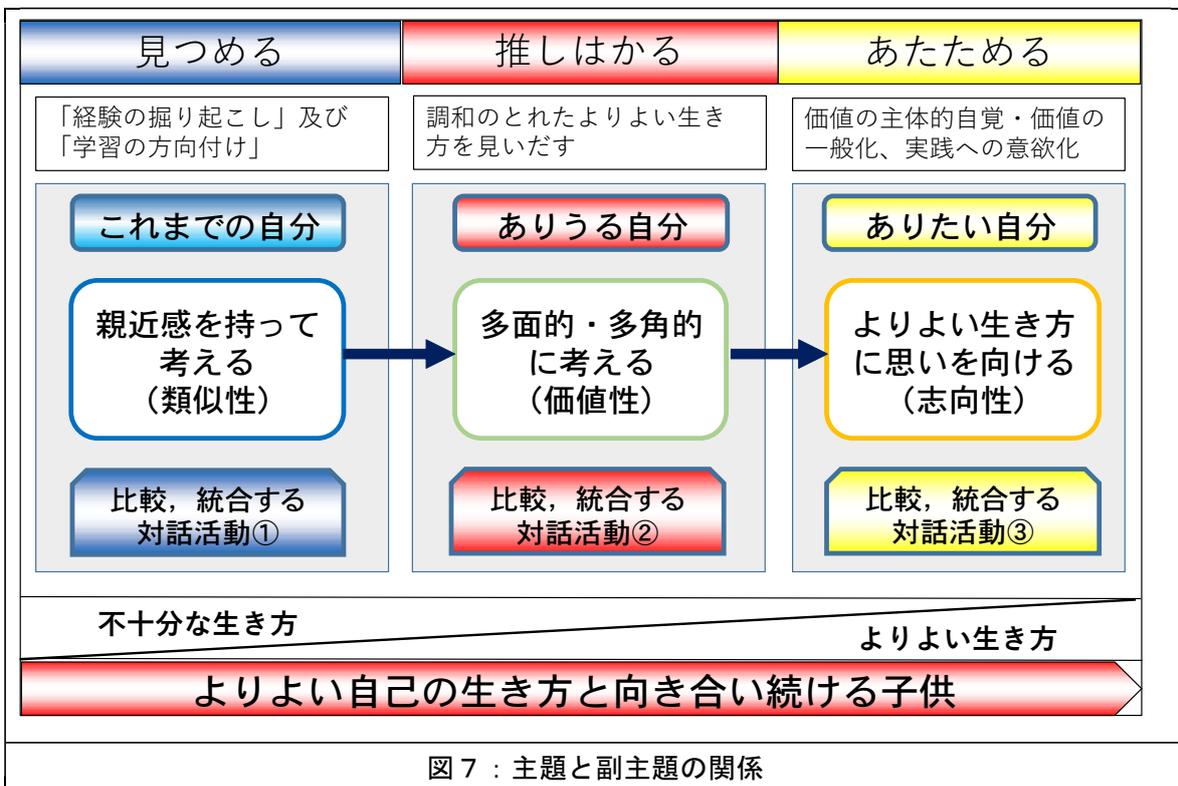


図7：主題と副主題の関係

### 3 研究の目標

道徳科の学習において、自己の生き方と向き合い続ける子供を育てるために、自分なりの感じ方・考え方を見直したり新たにしたりする過程を「見つめる」「推しはかる」「あたためる」の3段階で構成し、それぞれの段階に「自分と比較、統合する対話活動」を位置付けることの有効性を明らかにする。

### 4 研究の仮説

以下の視点から自分と比較、統合する対話活動を機能させれば、「これまでの自分」「ありうる自分」「ありたい自分」を見だし、自己の生き方と向き合い続ける子供が育つであろう。

【視点1】 子供の感じ方・考え方の傾向を把握する手法の具体化

【視点2】 対話活動を位置付けた学習過程の最適化

【視点3】 感じ方・考え方の自覚を促す表現活動の工夫と支援

### 5 研究の構想

#### (1) 子供の感じ方・考え方の傾向を把握する手法の具体化

各学年における価値内容の系統性、子供の価値内容に対する実態からねらいを設定することで、「これまでの自分」「ありうる自分」「ありたい自分」について思考できる授業を展開することができる。その過程で、子供が問題意識をもち、多様な考え方をもとに道徳的価値について考え、よりよい生き方に思いを向けることができる。具体的手順は以下のとおりである。

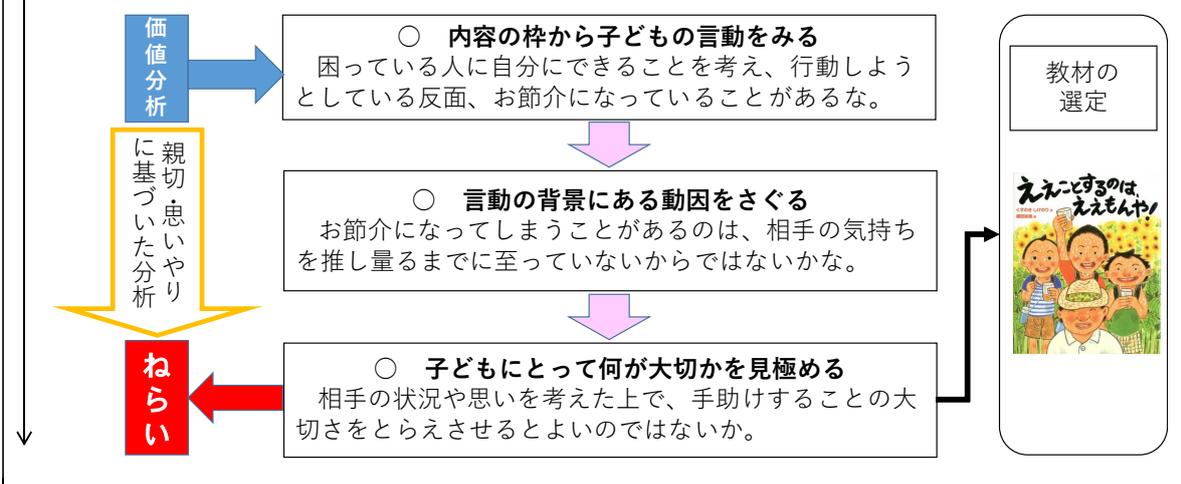
#### 手順1 子供の道徳性の発達段階を分析する。

・低・中・高学年のまとまりで示されている学習指導要領解説の内容を比較して、それぞれの内容の関連や要点を明らかにする。(例) B-7【親切・思いやり】

	対象	心と行為
低	身近にいる人	〈温かい心〉 ・～せずにはいられない、ほうっておけない
中	相手のこと	〈思いやり、進んで親切〉 ・自分の思いを相手に伝える(やる) ・自分の経験をもとに相手の思いを想像する
高	誰に対しても	〈思いやり、相手の立場に立った親切〉 ・相手の置かれている状況や気持ちをふまえ、どうすることが相手にとって最適か考える

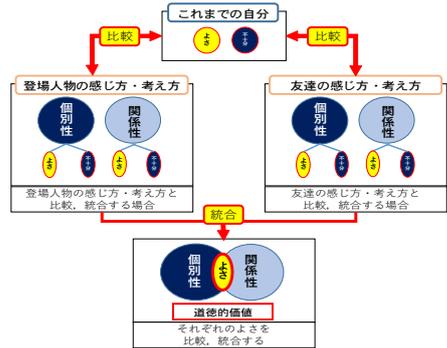
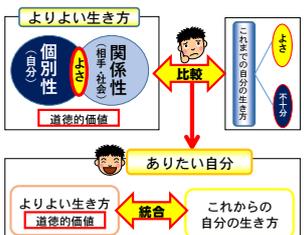
#### 手順2 子供の価値内容に対する実態について分析する。

・次の三つの段階で分析する。(例) B-7【親切・思いやり】



## (2) 対話活動を位置付けた学習過程の最適化

問題意識をもち、多様な考え方を基に道徳的価値について考え、よりよい生き方に思いを向けるために、対話活動を位置付けた学習過程を以下のように構成する。

学習過程	具体的活動と内容
<b>【見つめる】</b> <b>・対話活動①</b> 〈これまでの自分と対話〉	1 類似の事象と「これまでの自分」の経験を比較し、学習の方向性をつかむ。 ・道徳的価値に関する経験から、これまでの感じ方・考え方を掘り起こす。 ・問題意識を共有し、めあてを設定する。 
<b>【推しはかる】</b> <b>・対話活動②</b> 〈ありうる自分と対話〉	2 教材の登場人物や友達の感じ方・考え方を基に、新たな自分の感じ方や考え方を表出し、「ありうる自分」の道徳的価値についての理解を深める。  <ul style="list-style-type: none"> <li>・自他の判断と根拠を出し合い、感じ方や考え方を多面化する。</li> <li>・多面化したよさを時間的視点や空間的視点から検討し、取り出す。</li> <li>・取り出したよさを統合して、道徳的価値の内容を明らかにする。</li> </ul>
<b>【あたためる】</b> <b>・対話活動③</b> 〈ありたい自分と対話〉	3 道徳的価値を自己の内面に見だし、「ありたい自分」への意欲化を量る。  <ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの自分がもっていた、よきや不十分さを振り返る。</li> <li>・道徳的価値と、これまでの自分の生き方を照らし合わせる。</li> <li>・よりよい生き方を自分の生き方に統合し、ありたい自分を志向する。</li> </ul>

資料3：対話活動を位置付けた学習過程の最適化

## (3) 感じ方・考え方の自覚を促す表現活動の工夫と支援

表現することで、どの子供も自分の心や生き方と向き合い、道徳的価値について考えを整理し、自分の思いを表すことができる。そこで、本研究では、自分と比較、統合する対話活動における表現活動を工夫し、自分の感じ方・考え方を様々な表現方法で素直に表出させたい。そうすることで、子供が問題意識をもち、感じ方・考え方を多面化し、よりよい生き方と照らしながら自分の生き方を見つめ直すことができると考える。道徳科では一般的に、表2のような表現活動が予想されるが、本研究では特に、視覚的表現活動と言語的表現活動を重視する。

表2：表現方法の特徴と具体例

動作的表現活動	〈特徴〉具体的に表現され、共感や心の動きを捉えることができる。 【役割演技】：即興的に自由に演じさせ、言動の背景や心情を探ることができる。
視覚的表現活動	〈特徴〉色や形、大きさ、位置、変化を推し量ることができ、気持ちや考えを明確にしていくことができる。 【表情図】：表情で表すことで、考えが明確になり、自己や他者との交流で考えを深めることができる。 【関係図】：自分と他者との関係を位置や大きさ、重なりや矢印の向きで表すことで、関係を捉えながら考えることができる。
言語的表現活動	〈特徴〉言葉にすることで、考えが明確になり、自己や他者との交流で考えを深めることができる。 【吹き出し】：登場人物に共感しながら心情を言葉で表すことができ、自分の考えを明らかにすることができる。 【筆談対話】：登場人物の気持ちの変化を意図的に表すことができ、自分の考えを明らかにすることができる。
立場的表現活動	〈特徴〉自分の立場を明らかにすることで、考えが明確になり、自己や他者との交流で考えを深めることができる。 【二項めもり】：自分が登場人物だったらどうするかを二項対立めもりで意思表示することができ、登場人物の行為の背景や思いを明らかにすることができる。 【立場討論】：登場人物の思いの理解を意思表示することができ、行為の背景や思いを明らかにすることができる。

以下に具体的支援の工夫を示す。

### ① 学習ノートの工夫

資料4のような学習ノートを三つの仕組みに沿って、以下のように活用する。

主題・大切な生活リズム  
教材「カスミと携帯電話」

「これまでの自分」↓夜ふかししてて、朝起きられない。  
「ありうる自分」↓規則正しい方が健康的な生活になる。  
「ありたい自分」↓生活リズムが整うと、これから先も健康に気持ちよく生活できる。

こんな三つの自分を、左の学習ノートの仕組みに沿って表出させていく。

・ **仕組み①**について  
「見つめる」段階の対話活動①では、事象に対して「自分は、〇〇する。」や「自分なら〇〇だと思う。」といった、投影的な考えや共感的な考えを書かせる。このことにより、これまでの自分の感じ方や考え方を自覚できるようになる。

・ **仕組み②**について  
「推しはかる」段階の対話活動②では、「主人公のとした行為について、私は〇〇だと思う。」や「主人公は△△だから、きっと〇〇したのだと思う。」といった、空間的視点や時間的視点から批判的な考えや分析的な考えを書かせる。このことにより、ありうる自分の感じ方や考え方を多面化できるようになる。

・ **仕組み③**について  
「あたためる」段階の対話活動③では、「私も以前、主人公と同じような場面があった。だけど主人公がとした行為はできなかった。それは△△な心が足りなかったので、次はその心をプラスして〇〇な自分になっていきたい。」や「僕は主人公と同じことができています。でも、△△な考えはできていなかったもので、これからは△△な考えもできる自分になりたい。」といった、これまでの自分の不十分さやよさ、これから先どんな自分になっていきたいかを書かせる。このことにより、よりよい生き方に必要な感じ方や考え方を大切に、ありたい自分を展望することができるようになる。

**資料4：学習ノートの仕組み**

### ② ICT機器の活用

次の二つのICT機器の特性を生かし、活用する。

**【焦点化】**…物事に対するこれまでの自分について考えたり、比べたりすることで問題意識を共有し明確にすることができる。

※ 主に自分と比較、統合する対話活動①で活用

**【共有化】**…ありうる自分について考えたり、比べたりすることで道徳的価値の根拠を明らかにし、共通理解することができる。

※ 主に自分と比較、統合する対話活動②で活用



資料5：ICT機器活用例

#### (4) 実践検証の進め方について

文部科学省は、道徳科の評価の在り方について以下の指針を打ち出している。

- ・ 学習活動において児童生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視すること

#### 資料6：道徳科の評価の在り方

このことから本研究においては、「自分と比較，統合する対話活動」の連続を重視した授業実践の有効性を以下の方法で検証していく。

検証1：学習ノート・・・「見つめる」「推しはかる」「あたためる」の各段階における対話活動が資料2に示す学習ノートに表現されているかどうかを見取る。

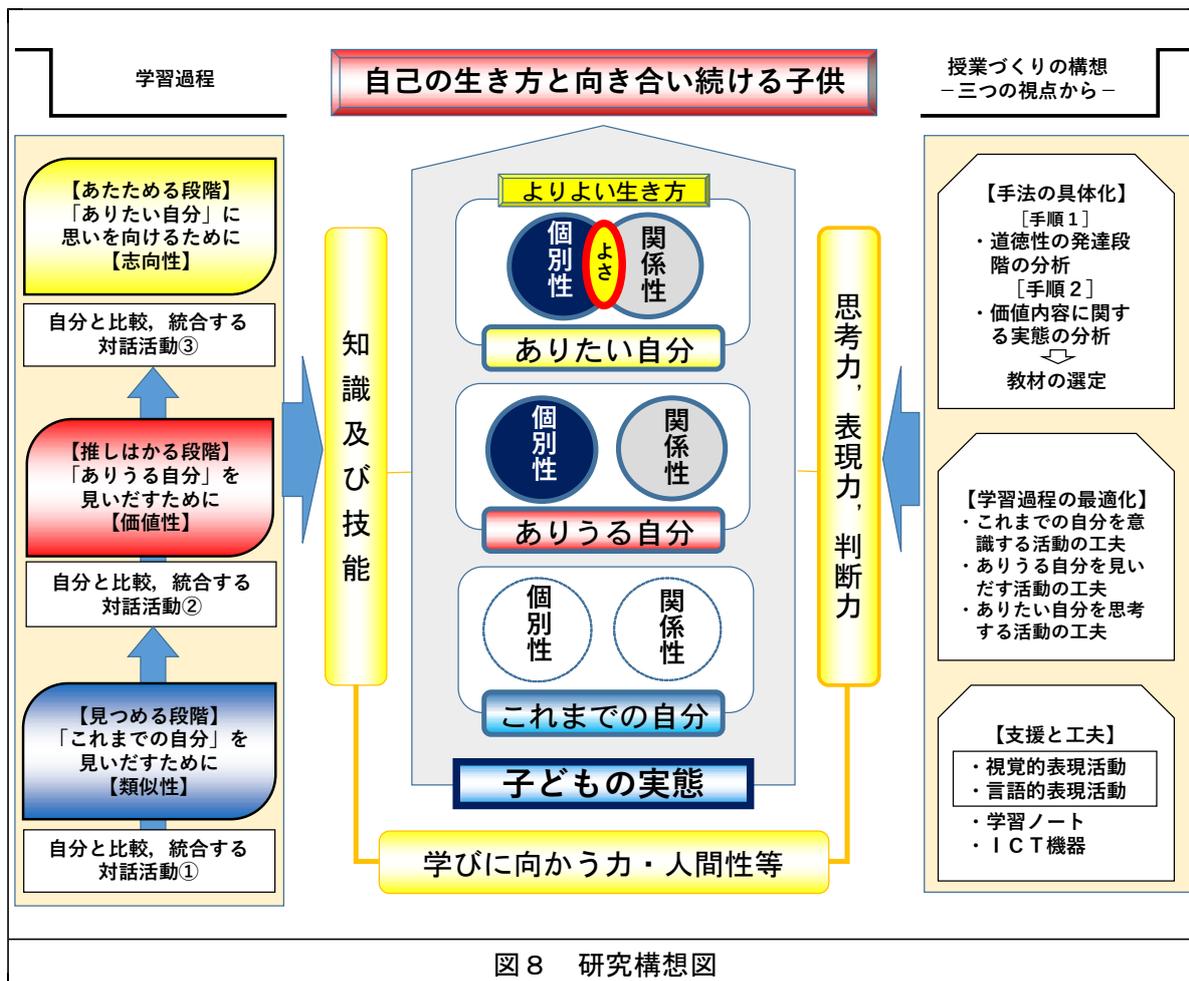
検証2：アンケート・・・「これまでの自分」「ありうる自分」「ありたい自分」を意識することができたかどうかを4段階の評定尺度を設定して自己評価する。

検証1と検証2の相関関係分析することによって、「自分と比較，統合する対話活動」の連続を位置付けた学習過程の有効性を明らかにすることができると考える。

対話活動①	これまでの自分が行ってきた行動のよさや不十分さを意識することができましたか。	4・3・2・1
対話活動②	教材の人物や友達への考えのよさに気づき、自分の考えを広げることができましたか。	4・3・2・1
対話活動③	見つけた大切な心をこれからの自分の生き方につなげていこうと思えましたか。	4・3・2・1

#### 資料7：アンケートの具体例

#### (5) 研究の構想図



## 6 研究の実際

(1) 実践1 第5学年 B-2【礼儀】 主題名「あいさつの心」

教材名「あいさつ運動」(日本文教出版)

### ① 実践1の概要

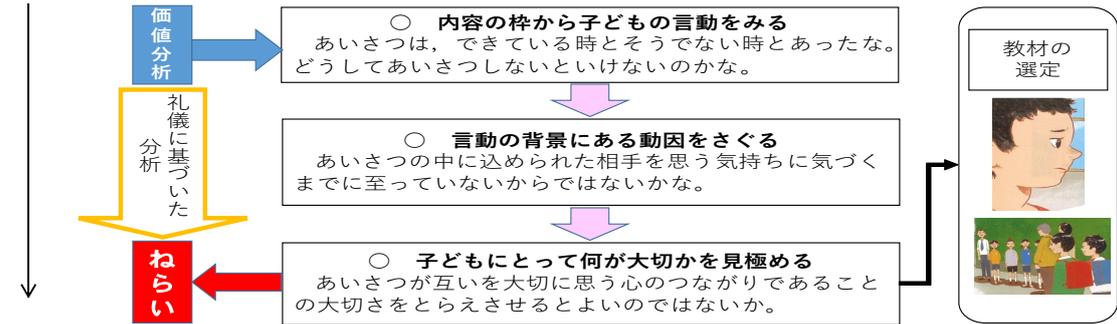
ねらい	挨拶とは、相手を大切にし互いの心をつなぐものであることが分かり、他者と共に気持ちよく生活しようとする態度を育てる。	
目 標		
学びに向かう力・人間性等	思考力, 表現力, 判断力等	知識及び技能
・これまでの自分の挨拶について問題意識をもち、挨拶のよさや大切さに気づき、実践しようとする思いをもっている。	・挨拶することについて三つの立場から多面的・多角的に考え、挨拶がなぜ大切なのかを判断することができる。	・挨拶が互いを大切に思う心のつながりであることの大切さを理解することができる。
教材の概要		
この教材は、転校生の道夫が毎朝元気な声で友達に挨拶をする。しかし、学級内では「道夫は目立ちたがり屋だ。」という噂が流れ始め、わざと道夫を避けるようになり、教室には何となく嫌な空気が流れていた。そんな中、先生から道夫の挨拶の素晴らしさについての話があり、道夫の挨拶のよさに学級みんなが気づき、心のこもった挨拶をしていく学級や学校へと変容していく話である。		
本教材で目指す具体的な児童像		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの自分の挨拶の経験をふり返り、挨拶をできている自分のよさや、できていなかった不十分さに対する自分を見つめる児童</li> <li>・教材の人物や友達の「挨拶すると相手も気持ちよくなる」や「されなかったらモヤモヤする」といった感じ方・考え方を受け入れ、互いに挨拶すると「自分も相手も気持ちよくなる」といった多面的・多角的に考える児童</li> <li>・捉えた道徳的価値とこれまでの自分を照らし合わせ、「お互いが気持ちよくなれるように、自分から積極的に挨拶できるようにしていきたい」といったよりよい生き方を志向できる児童</li> </ul>		
資料8： 主題名「あいさつの心」における学習の概要		

### ② 指導の立場

ア 子供の感じ方・考え方の傾向を把握する手法の具体化(具体的構想 視点1)

手順1 子供の道徳性の発達段階を分析する		
	対 象	心と行為
低	身近な集団	〈礼儀の型を身につける〉 ・礼儀の型を知り、身につけると共に、礼儀が互いに気持ちよくするものである大切さについて考える
中	誰に対しても	〈心を込めた礼儀〉 ・気の合う集団だけでなく、誰に対しても本心から敬意を払い、真心をもって接する大切さについて考える
高	社会全体	〈時と場に応じた礼儀〉 ・礼儀は社会生活上欠かせないものあり、礼儀作法の中に込められた相手を思う気持ちを考える

手順2 子供の価値内容に対する実態を分析する



資料9：主題名「あいさつの心」における手法の具体化

イ 学習過程の最適化（具体的構想 視点2）

※ 指導の実際の中で具体的に示す。

ウ 支援と工夫（具体的構想 視点3）

※ 指導の実際の中で具体的に述べていく。

③ 指導の実際と考察

ア 「対話活動①」の実際

この活動のねらいは、挨拶に関する「これまでの自分」の経験を掘り起こし、自分の挨拶のよさや不十分さを意識化させることである。そこで、「あいさつメーター」に自分の挨拶を数値化させ、その根拠について交流させた。そして、『どうして挨拶するんだろうね。』と問い、挨拶の必要性についてのめあてを設定した。

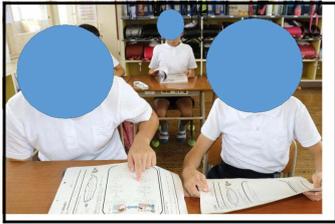
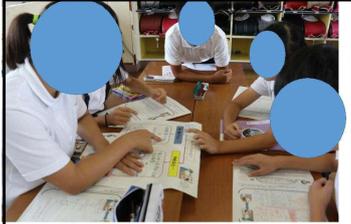
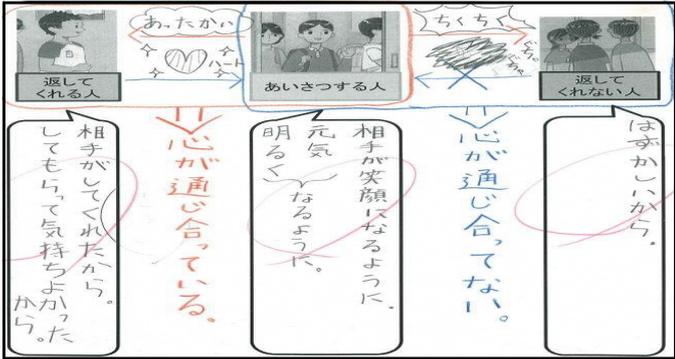
教師の発問	子供の反応
<p>自分と比較，統合する対話活動①</p> <p>T1： これまでの自分の「あいさつ」はどう？ いつでもしてる？だれにでもしてる？ 「あいさつメーター」に書いてみましょう。</p> <p>【これまでの自分と対話】</p>	<p>〈A児〉</p> <p>〈B児〉</p> <p>【資料10：挨拶に対する自分の感じ方・考え方】 【ノート仕組み①】と【視覚的表現活動】</p>
<p>～友達と交流し，問題意識をもつ～</p> <p>T2：自分の「あいさつメーター」を見せて，そのわけを友達に伝えてみよう。</p> <p>T3：どうして挨拶するんだろうね。別にしなくてもいいんじゃない。</p>	<p>A児：僕は3.5にしました。わけは知っている人には挨拶できているけど、知らない人にはできていないからです。</p> <p>B児：私は4.3です。0.7は恥ずかしくて小さな声で挨拶することがあるからです。</p> <p>【写真1：これまでの自分を意識化する子供の姿】</p> <p>【自他の判断の交流】</p>

.....「対話活動①」の考察.....

「対話活動①」においてA児とB児を分析していくと、A児は「3. 5。わけは、知っている人には挨拶できているから。」といった挨拶に対する自分の感じ方・考え方を見直し、「これまでの自分」を表出している。B児は「4. 3。残りの0. 7は恥ずかしくて小さな声で挨拶していたから。」といった挨拶に対する自分の感じ方・考え方を見直し、「これまでの自分」を表出している。以上のことから、挨拶に対する自分の経験を掘り起こす対話活動①やノート仕組み①と表現活動が「これまでの自分」のよさや不十分さを表出させるための有効な手立てだったと考える（類似性の発揮）。

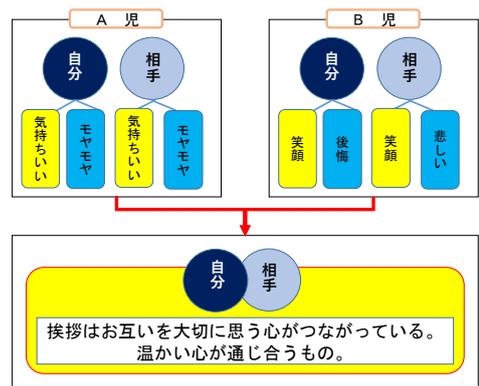
イ 「対話活動②」の実際

この活動のねらいは、教材の登場人物や友達の感じ方・考え方を基に、自分の感じ方・考え方を多面化させ道徳的価値についての理解を深めることである。ここでは、挨拶する人・返す人・返さない人の三つの立場から心情を追求していった。よさや不十分さを交流させた際には、『挨拶できた関係と、できなかった関係では何が違うのか。』と問い、空間的視点から挨拶のもつよさを比較、統合させた。

教師の発問	子供の反応
<p><b>自分と比較，統合する対話活動②</b></p> <p>T 1 : 挨拶する人, 挨拶を返す人, 挨拶を返さない人の3つの立場になって, それぞれの思いや考えを書いてみよう。</p> <p>【教材の登場人物や友達と対話】</p>	<p>挨拶する：相手が笑顔になるように。</p> <p>返す：してもらって気持ちが良かったから。</p> <p>返さない：めんどくさいから。</p>  <p>【写真2：感じ方・考え方を多様にする子供の姿】</p>
<p>～空間的視点から吟味する～</p> <p>T 2 : 挨拶できた関係とそうでない関係は何が違うのだろう。</p>  <p>【写真3：空間的視点からよさを吟味する子供の姿】</p> <p>T 3 : みんなの考えた挨拶するよさを合わせると, いろんなことが分かったかな。</p> <p>【よさを統合する】</p>	 <p>【資料11：多面化した自分の感じ方・考え方】</p> <p>[ノート仕組み②] と [視覚的・言語的表現活動]</p> <p>A児：挨拶はお互いを大切に思う心と心がつながる大切なことだと思いました。</p> <p>B児：お互いの温かい気持ちが通じ合うものが挨拶の中にあることが分かりました。</p>

.....「対話活動②」の考察.....

「対話活動②」において分析していくと、A児は「お互いが笑顔になったり気持ちよくなる。」といった、個別性と関係性から挨拶に対する自分の感じ方・考え方を新たにした「ありうる自分」を表出している。B児も「お互いの温かい気持ちが通じ合う。」といった、個別性と関係性から挨拶に対する自分の感じ方・考え方を多面化した「ありうる自分」を表出している。「よさを統合する」場面において、A児もB児も「挨拶はお互いを大切に思う心がつながっている。温かい心が通じ合うものが挨拶である。」といった、個別性と関係性のよさを十分に統合できた姿だと考える。以上のことから、「ありうる自分」について、自分の感じ方・考え方を多面化し、道徳的価値を見出すことはできた。それは、資料11の記述や、A児とB児のような発言から分かる。また、「挨拶できた関係とできなかった関係は何が違うのか。」といった空間的視点から価値を吟味したことと、それを表現するノート仕組み②と表現活動が有効な手立てだったと考える（価値性の発揮）。



ウ 「対話活動③」の実際

この活動のねらいは、捉えた道徳的価値を基に、これまでの自分もっていた挨拶に対する感じ方・考え方のよさや不十分さをふり返り、「ありたい自分」を志向することである。そこで、学習ノート仕組み③に「挨拶に対するこれまでの自分もっていたよさや不十分さ」「見直したり新たにした感じ方・考え方」「これからの自分の挨拶について」を書かせるようにした。

教師の発問	子供の反応
<p><b>自分と比較，統合する対話活動③</b></p> <p>T1： 今日学習を通して新しく気づいたことや考えたこと、これからの自分の挨拶について新たにプラスしていきたいことについて見つめ直してみよう。</p> <p>【ありたい自分と対話】</p>	<p>A児</p> <p>〈自分を見つめ直す〉</p> <p><u>ぼくのあいさつには、まだ足りないところがあったことに気づきました。それは、今日の授業で「あいさつが自分も相手も大切に思う心につながるもの、だと分かったからです。だから、だれにでも自分から気持ちよくあいさつできる自分になりたいです。</u></p> <p>【資料12：よりよい生き方に思いを向ける子供の姿】</p> <p>[ノート仕組み③] と [言語的表現活動]</p>

.....「対話活動③」の考察.....

「対話活動③」において分析していくと、これまでの自分の挨拶に対する感じ方・考え方の不十分さをふり返る姿（青線）や、学習を通して自分の感じ方・考え方を見直したり新たにしたこと（赤線）から、捉えた道徳的価値と自分を照らし合わせ、よりよい生き方に思いを向けた（黄線）「ありたい自分」を表出している。

資料12の子供は、よりよい生き方に思いを向ける対話活動③やノート仕組み③と言語的表現活動によって、「ありたい自分」を表出させることができたが、大多数の子供は不十分な内容であった（志向性の発揮）。

#### ④ 実践1のまとめ

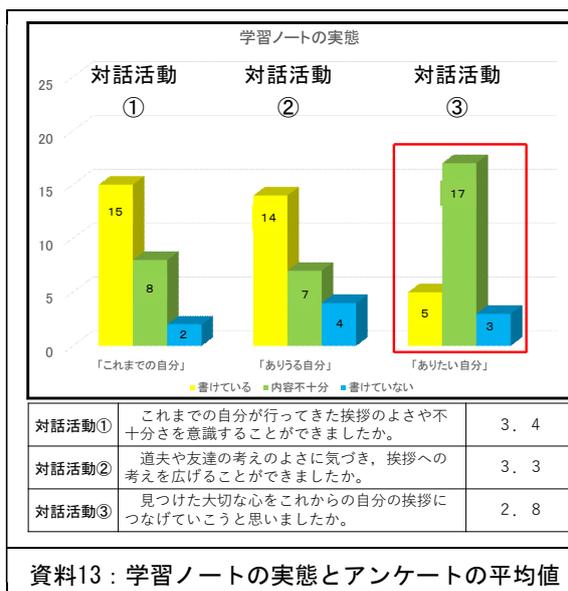
##### — 子供の姿の変容について —

資料13は、実践後にとった子供の学習ノートの実態とアンケート結果である。

学習ノートの実態から、対話活動①の「これまでの自分」を意識化できている子供の数と、対話活動②の「ありうる自分」を多面化できている子供の数が多いことが分かる。

しかし、対話活動③において、「ありたい自分」を具体的に志向できている子供に関しては、「これまでの自分」や「ありうる自分」の子供の数と比べると、とても少なかった。

このことから、実践2における授業づくりの工夫改善の方向性を明らかにする。



##### — 子供の感じ方・考え方の傾向を把握する手法の具体化から —

各学年における価値内容の系統性、子供の価値内容に対する実態からねらいを設定したことで、次のような子供の姿が見られた。

- ・挨拶に対するこれまでの自分の感じ方・考え方を意識化した姿（14頁－資料10）。
- ・登場人物や友達の感じ方・考え方を基に、自分の感じ方・考え方を見直したり新たにしたりする姿（15頁－資料11）。
- ・道徳的価値と自分を照らし合わせ、よりよい生き方に思いを向けた姿（16頁－資料12）。

以上のことから、子供の感じ方・考え方の傾向を把握する手法の具体化は、自分と比較、統合する対話活動を有効に機能させる上で有効である。

##### — 学習過程の最適化から —

対話活動を位置付けた学習過程を構成したことで、問題意識をもち、多様な考え方を基に道徳的価値について考え、よりよい生き方に思いを向ける子供の姿が見られた。しかし、対話活動③については課題が見られた。詳しくは「⑤今後の課題」で述べる。

##### — 支援と工夫から —

学習ノートを三つの仕組みに沿って活用したことで、「これまでの自分」「ありうる自分」「ありたい自分」を表出する姿が見られた。しかし、対話活動③における「ありたい自分」を表出した学習ノートには課題が見られた。詳しくは⑤の今後の課題で述べる。

#### ⑤ 今後の課題

「対話活動③」においては、資料12のように記述できていた子供が5名にとどまっていた。ほとんどの子供が、どんなよりよい生き方を志向するのかが記述しているものの、なぜ志向するののかという根拠をもつまでには至っていない。このことから、本実践では、これまでの自分と比較、統合する対話活動の連続ができたとはいえない。このことから、実践2においては、これまでの自分をもって、よさや不十分さを根拠としてよりよい生き方について考える手立てが必要である。

(2) 実践2 第5学年 C-15【家族愛、家庭生活の充実】 主題名「家族の一員として」  
教材名「家族のために」(日本文教出版)

① 実践2の概要

ねらい	家族はみんなの幸せを考え、それぞれの役割を分担して行っていることが分かり、家族の一員として自分の役割を自覚し、進んで役に立つことをしようとする態度を育てる。
-----	--

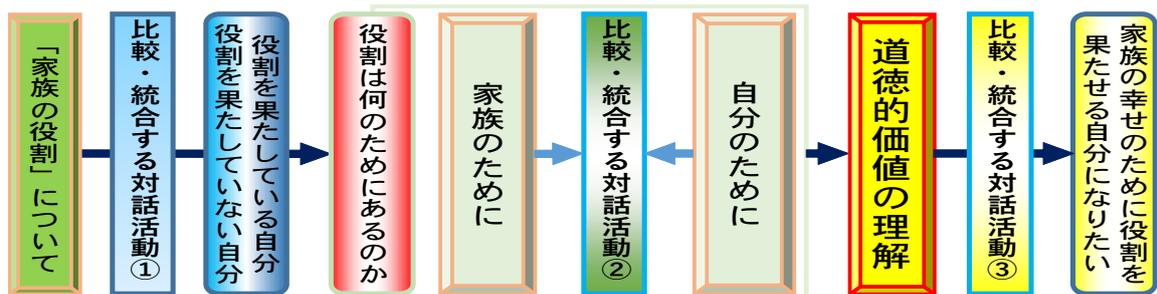
目 標

学びに向かう力・人間性等	思考力, 表現力, 判断力等	知識及び技能
・これまでの自分の家族の役割について問題意識をもち、役割のよさや大切さに気づき、実践しようとする思いをもっている。	・家族の役割について三つの立場から多面的・多角的に考え、役割を果たすことがなぜ大切なのかを判断することができる。	・家族の一員として、それぞれの役割を果たすことが家族の幸せにつながることを理解することができる。

教材の概要

この教材は、主人公アキが洗濯物を取りこむ仕事になっている。ある日、下校中に雨が降り始めたので走って家に帰り、雨にぬれながら洗濯物を取りこみ腹を立てるアキ。父や母の帰りも遅く、さらに腹が立ち、洗濯物をそのままにして寝てしまう。次の朝、お弁当作りをしていたお母さんとの話から、家族一人一人の役割によって家庭生活が成り立っている大切さに気づき、家族のために自分の役割以外のことにも進んで取り組んでいく姿へと変容していく話である。

本教材で目指す具体的な児童像



- ・これまでの自分の家族の役割に対する経験をふり返り、役割を果たしている自分のよさや、果たせていなかった不十分さに対する自分を見つめる児童
- ・教材の人物や友達の「家族みんなのためになる」や「しなかったらみんなが困る」といった感じ方・考え方を受け入れ、家族が進んで自分の役割を果たすと「家族の幸せになる」といった多面的・多角的に考える児童
- ・捉えた道徳的価値とこれまでの自分を照らし合わせ、「家族が幸せに生活できるように、自分から進んで役割を果たせるようにしていきたい」といったよりよい生き方を志向できる児童

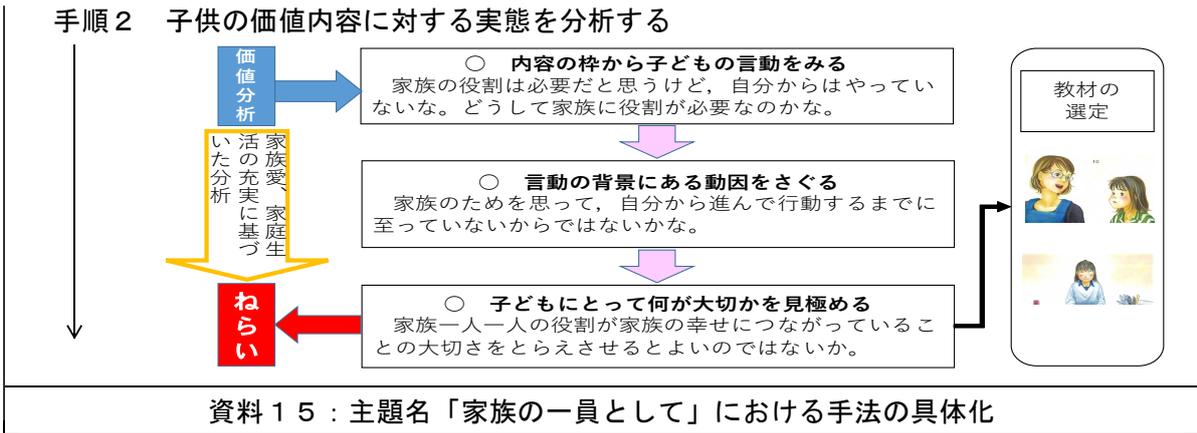
資料14: 主題名「家族の一員として」における学習の概要

② 指導の立場

ア 子供の感じ方・考え方の傾向を把握する手法の具体化(具体的構想 視点1)

手順1 子供の道徳性の発達段階を分析する

	対 象	心と行為
低	受け身	〈家族の愛情, 家族に対する親愛の情〉 ・家族からの愛情を一身に受けていることに気づき、自分や家族を思う心の大切さについて考える
中	一員としての自覚	〈家族に対する感謝の情〉 ・家族を一つの集団として捉え、尊重すべき対象を見出していくと共に、自分にできることで助け合う大切さについて考える
高	主体的な態度	〈家族に対する尊敬の情〉 ・よりよい家庭生活の実現を担う一人として、自分にできることを具体的に考え、積極的に役割を果たす大切さを考える



**イ 学習過程の最適化（具体的構想 視点2）**

実践1の⑤今後の課題で述べたように、「対話活動③」では、これまでの自分がもっていた、よさや不十分さを根拠としてよりよい生き方について考えられるように、自分の事前アンケートを基に見つめ直す手立て（資料16の赤枠内）を工夫した。

**実践2の板書**

学習過程	具体的活動と内容
<b>【見つめる】</b> <b>・対話活動①</b> <small>〈これまでの自分と対話〉</small>	1 家族の役割と「これまでの自分」の経験を比較し、学習の方向性をつかむ。 ・「家族に役割は必要か」「役割を果たしているか」に関する経験から、これまでの感じ方・考え方を掘り起こす。 ・「役割は必要だと思っているが、果たしていない」問題意識を共有し、めあてを設定する。
<b>【推しはかる】</b> <b>・対話活動②</b> <small>〈ありうる自分と対話〉</small>	2 登場人物や友達の家族の役割に対する感じ方・考え方を基に、家族の役割に対する新たな自分の感じ方や考え方を表出し、「ありうる自分」の道徳的価値についての理解を深める。 ・アキが父や母のどんな行為から親の思いに気づき、変化したのかについて両親の立場から考え、感じ方や考え方を多面化する。 ・「どうして洗濯物を丁寧に畳んだ上に自分の役割でもない弁当箱をゴソゴソ洗い始めたのか」といった多面化したよさを空間的視点から検討し、取り出す。 ・3人に共通した思いのよさを統合して、道徳的価値の内容を明らかにする。
<b>【あたためる】</b> <b>・対話活動③</b> <small>〈ありたい自分と対話〉</small>	3 捉えた道徳的価値を自己の内面に見いだし、家族の役割に対する「ありたい自分」への意欲化を量る。 ・これまでの自分がもっていた、家族の役割を果たしているよさや、果たしていなかった不十分さを事前アンケートを基に振り返る。 ・「一人一人が自分の役割を進んで行うことが、家族の幸せにつながる」という道徳的価値と、事前アンケートを基にした「家族の役割に対するこれまでの自分」を照らし合わせる。 ・よりよい生き方を自分の生き方に統合し、アンケートを基にしたこれまでの自分を根拠に「ありたい自分」を志向する。

**資料16：主題名「家族の一員として」における学習過程の最適化**

ウ 支援と工夫（具体的構想 視点3）

※ 指導の実際の中で具体的に述べていく。

③ 指導の実際と考察

ア 「対話活動①」の実際

この活動のねらいは、家族の役割に関する「これまでの自分」の経験を掘り起こし、役割果たす自分のよさや不十分さを意識化させることである。そこで事前にアンケートを実施し、「家で自分の役割を進んでしているか」「家族に役割が必要だと思うか」における心情と行為のズレを電子黒板に表示し、その根拠について交流させた。そして、『自分の役割をいつも進んでしている人がいないのに、全員が家族に役割が必要だと答えているね。どうしてかな。』と問い、家族の役割の大切さについてのめあてを設定した。

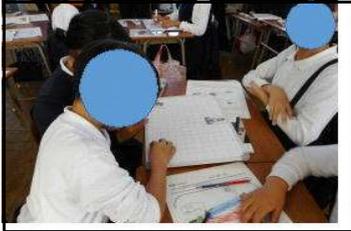
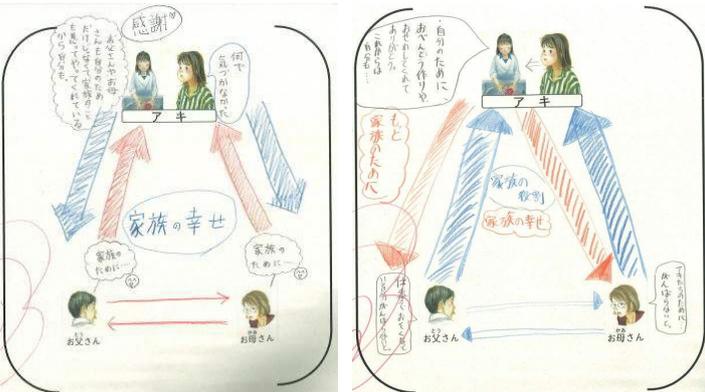
教師の発問	子供の反応
<p>自分と比較，統合する対話活動①</p> <p>T 1：この前みんなに書いてもらったアンケートの結果どうだったと思う。それでは、まず「自分の役割を進んでしていますか」から見ていくよ…。</p> <p>【これまでの自分と対話】</p>	<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-right: 10px;"> <p>家で自分の役割を進んでしていますか？</p> <p>【いつも】…0人 【ときどき】…20人 【していない】…5人</p> </div> <div style="text-align: center; margin-right: 10px;"> <p>↕</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【必要です】 <b>25人</b></p> </div> <div style="margin-left: 20px;">  </div> </div> <p>【資料17：挨拶に対する自分の感じ方・考え方】 [アンケート（ノート仕組み①）]と[ICT機器活用]</p>
<p>～友達と交流し，問題意識をもつ～</p> <p>T 2：ほとんどの人が役割を果たしていないのに、どうして全員が家族に役割が必要だと答えているのかな。</p> <p>T 3：どうして家族には役割があるんだろうね。別になくてもいいんじゃない。</p>	<div style="display: flex;"> <div style="margin-right: 20px;">  <p>【写真4：これまでの自分を意識化する子供の姿】</p> </div> <div> <p>A児：僕は<u>ときどき</u>やっています。やっ てなかったら<u>怒られるし</u>、<u>家族が 困る</u>からです。</p> <p>B児：私は<u>言われたい</u>としていません。 <u>めんどくさいし</u>、<u>やっても文句言 われて嫌な気持ちになったこと</u>が あるからです。</p> </div> </div> <p>【自他の判断の交流】</p>

.....「対話活動①」の考察.....

「対話活動①」においてA児とB児を分析していくと、A児は「ときどきやっている。わけは、怒られるし、家族が困るから。」といった家族の役割に対する自分の感じ方・考え方を見直し、「これまでの自分」を表出している。B児は「言われたいとしない。めんどくさいし、やったのに文句を言われて嫌な気持ちになったから。」といった家族の役割に対する自分の感じ方・考え方を見直し、「これまでの自分」を表出している。以上のことから、自分の経験を掘り起こす対話活動①やアンケート（ノート仕組み①）とICT機器の活用が「これまでの自分」のよさや不十分さを表出させるための有効な手立てだったと考える（類似性の発揮）。

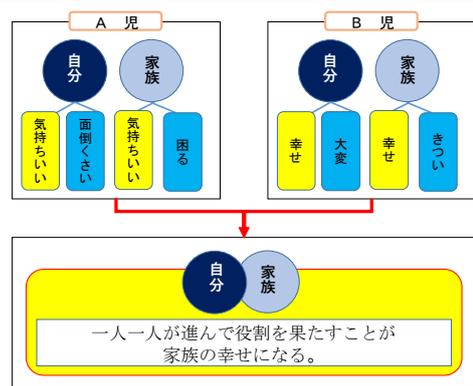
## イ 「対話活動②」の実際

この活動のねらいは、教材の登場人物や友達の感じ方・考え方を基に、自分の感じ方・考え方を多面化させ道徳的価値についての理解を深めることである。ここではまず、アキが父や母のどんな行為から親の思いに気づき、変化したのかについて両親の立場から考えることができるようにした。次に、『どうして洗濯物を丁寧に畳んだ上に自分の役割でもない弁当箱をゴシゴシ洗い始めたのか。』と問い、空間的視点から家族の役割のもつよさを比較、統合させて道徳的価値を追求させた。

教師の発問	子供の反応
<p><b>自分と比較，統合する対話活動②</b></p> <p>T 1 : どうしてアキは言葉につまってしまったのかな。お父さん、お母さんのどんな思いに気づいたんだろうね。</p> <p>【教材の登場人物や友達と対話】</p>	<p>子供の反応</p> <p>お父さん：どんなに仕事が忙しくても、毎日朝早くから家族のために洗濯物を工夫して干していることに気づいたと思う。</p>  <p>【写真5：感じ方・考え方を多様にする子供の姿】</p> <p>お母さん：仕事で遅くなっても、毎日朝早くから弁当の準備を家族のためにやってくれていることに気づいたと思う。</p>
<p>～空間的視点から吟味する～</p> <p>T 2 : どうしてアキは、自分の役割でもない弁当箱をゴシゴシ洗い始めたのか。</p>  <p>【写真6：空間的視点からよさを吟味する子供の姿】</p> <p>T 3 : 三人に共通していることとして、どんなことだと思いますか。</p> <p>【よさを統合する】</p> <p>みんなが役割を果たす家族とそうでない家族との違いはあるのかな。</p>	 <p>〈A児〉</p> <p>〈B児〉</p> <p>【資料18：多面化した自分の感じ方・考え方】</p> <p>[ノート仕組み②] と [視覚的・言語的表現活動]</p> <p>[ICT機器活用（全体交流で使用）]</p> <p>A児：「<u>家族のために</u>」という思いが三人に共通していると思います。もし、家族の中で誰かが自分の役割を果たさなかったら、<u>家族の誰かがやらないといけないし、家族の生活が気持ちよくなならない</u>と思う。</p> <p>B児：<u>一人一人が進んで自分の役割を果たす家族は、みんなが幸せになる</u>と思います。きついこともあるかもしれないけれど、<u>みんなで支え合うこと大切さが分かりました</u>。</p>

.....「対話活動②」の考察.....

「対話活動②」において分析していくと、A児は「それぞれが役割を果たすと、自分も家族も気持ちよく生活できる。」といった、個別性と関係性から自分の感じ方・考え方を新たにした「ありうる自分」を表出している。B児も「家族で支え合うことが大切。」といった、個別性と関係性から自分の感じ方・考え方を多面化した「ありうる自分」を表出している。「よさを統合する」場面において、A児もB児も「進んで役割を果たすことが家族の幸せになる。」といった、個別性と関係性のよさを十分に統合できた姿だと考える。以上のことから、「ありうる自分」について、自分の感じ方・考え方を多面化し、道徳的価値を見出すことはできた。それは、資料18のノートの記事や、A児とB児のような発言から分かる。また、「どうしてアキは、自分の役割でもない弁当箱をゴシゴシ洗い始めたのか。」といった空間的視点から価値を吟味したことと、それを表現するノート仕組み②と表現活動が有効な手立てだったと考える（価値性の発揮）。



ウ 「対話活動③」の実際

この活動のねらいは、捉えた道徳的価値を基に、これまでの自分もっていた家族の役割に対する感じ方・考え方のよさや不十分さをふり返り、「ありたい自分」を志向することである。そこで、学習ノート仕組み③に「これまでの自分もっていたよさや不十分さ」「見直したり新たにした感じ方・考え方」「これからの自分について」を書かせるようにした。

自分と比較，統合する対話活動③ 子供の反応	
【ありたい自分と対話】	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <small>（自分を見つめ直す）</small>  <u>ぼくは今まで家族が困らないために役割があると</u>  <u>思っていました。だけど逆で、家族の幸せのために役</u>  <u>割がある。ことが分かりました。今毎日している皿洗いも</u>  <u>家族の幸せにつながっていると思って、これからがんばって</u>  <u>みたい。そして自分の役割以外も進んでやってみたいです。</u> </div> <p style="text-align: center;">〈A児〉</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <small>（自分を見つめ直す）</small>  <u>私は自分の仕事をするのがめんどくさくて、いつも</u>  <u>言われてからイヤイヤやっています。今日の学習で「一</u>  <u>人の役割が家族の幸せにつながっていることに気づいた</u>  <u>ときはおどろきました。いつもは難しいと思つけれどお風呂を</u>  <u>そうじをめんどくさく自分から進んでできるようになりました。</u> </div> <p style="text-align: center;">〈B児〉</p>
【資料19：よりよい生き方に思いを向ける子供の姿】〔ノート仕組み③〕と〔言語的表現活動〕	

.....「対話活動③」の考察.....

「あたためる段階」において分析していくと、これまでの自分の家族の役割に対する感じ方・考え方の不十分さをふり返る姿（青線）や、学習を通して自分の感じ方・考え方を見直したり新たにしたこと（赤線）から、捉えた道徳的価値と自分を照らし合わせ、事前アンケートを根拠にした、よりよい生き方に思いを向けた（黄線）「ありたい自分」を表出している子供の姿が多く見られた（資料19）。以上のことから、実践1での課題の解決策として考えた、事前アンケートを根拠として、よりよい生き方に思いを向ける対話活動③やノート仕組み③と言語的表現活動が有効な手立てだったと考える（志向性の発揮）。

#### ④ 実践2のまとめ

※ 子供の感じ方・考え方の傾向を把握する手法の具体化と、感じ方・考え方の自覚を促す表現活動の工夫と支援は実践1において有効性が実証できていたので、実践2では、「対話活動を位置付けた学習過程の最適化」を中心に述べる。

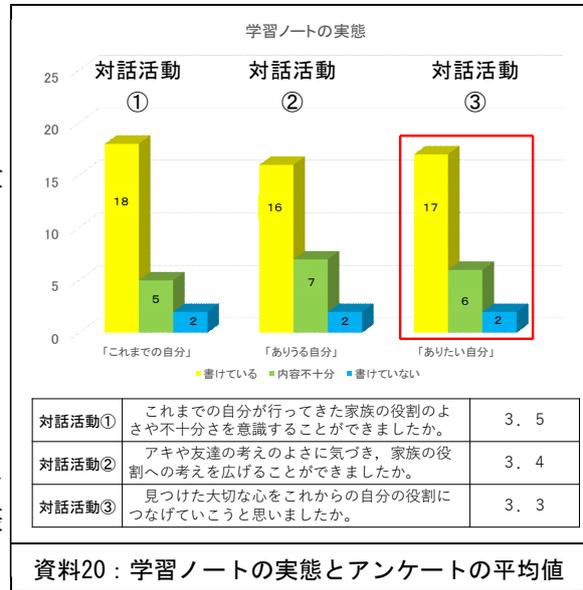
##### — 子供の姿の変容について —

資料20は、実践後にとった子供の学習ノートの実態とアンケート結果である。

実践1と比べると、「あたためる段階」において、よりよい生き方を志向する内容を書いた子供の数が増えたことが明らかになった。

特に、事前アンケートを基に対話活動③を行ったことが、実践1の課題であった「ありたい自分」を具体的に志向する子供を高めることにつながったことが分かる。

このことから、実践1の課題を基に、実践2に向けて行った工夫改善（事前アンケートを基に振り返り）が有効であったと考える。



##### — 学習過程の最適化から —

実践1の課題を基に、「あたためる段階」における対話活動③で事前アンケートを活用して「ありたい自分」を志向させた。その手順と子供の姿を以下に述べる。

##### 【手順1】

事前アンケートを基に、家族の役割に対するこれまでの自分もっていたよさや不十分さを書かせる。

- ・家族の役割に対するこれまでの自分の感じ方・考え方を振り返っている姿（資料21）。



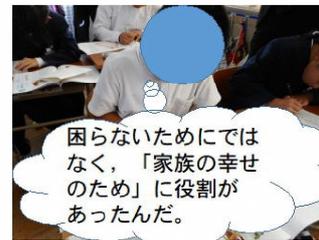
【資料21：手順1の子供の姿】

##### 【手順2】

板書や「推しはかる段階」で書いたノートからキーワードを取り出させ、これまでの自分を照らし合わせて書かせる。

- ・家族の役割に対するこれまでの自分の感じ方・考え方を見直したり、新たにしたりしている姿（資料22）。

※ キーワード：『役割は家族の幸せ』



【資料22：手順2の子供の姿】

##### 【手順3】

キーワードに迫る実践をする自分を想像させて、「ありたい自分」について書かせる。

- ・捉えた道徳的価値を基に、よりよい生き方の実現に向けた思いをもっている姿（資料23）。

※ キーワードに迫る実践については、学校や家庭における身近な体験から選択させる。



【資料23：手順3の子供の姿】

## 7 研究のまとめ

### (1) 研究の成果

本研究の成果については、次の2点から整理する。

- ・「見つめる段階」に「比較，統合する対話活動①」，「推しはかる段階」に「比較，統合する対話活動②」，「あたためる段階」に「比較，統合する対話活動③」を位置付けたことは，自己の生き方と向き合い続ける子供を育むことになったか。
- ・「子供の感じ方・考え方の傾向を把握する手法の具体化」「対話活動を位置付けた学習過程の最適化」「感じ方・考え方の自覚を促す表現活動の支援と工夫」の3点から授業づくりを構想したことは，「自分と比較，統合する対話活動の連続」を機能させることになったか。

#### ① 各段階に位置付けた「比較，統合する対話活動」の有効性について

実践1及び実践2における自己の生き方と向き合い続ける子供の育ちは，資料24に示すとおりである。

実践1の課題を基に，「あたためる段階」における対話活動③を改善したことが，実践2の子供の伸びにつながったと考える。

実践2後に実施したアンケート結果からも，三つ資質・能力の平均スコアが育ちの目安である3.0以上になったと考える。

—— 知識及び技能：3.3 ——

「自分と比較，統合する対話活動の連続」によって，自分や他者や教材とやり取りをしたことが，道徳的価値の意義や大切さを理解することにつながった。

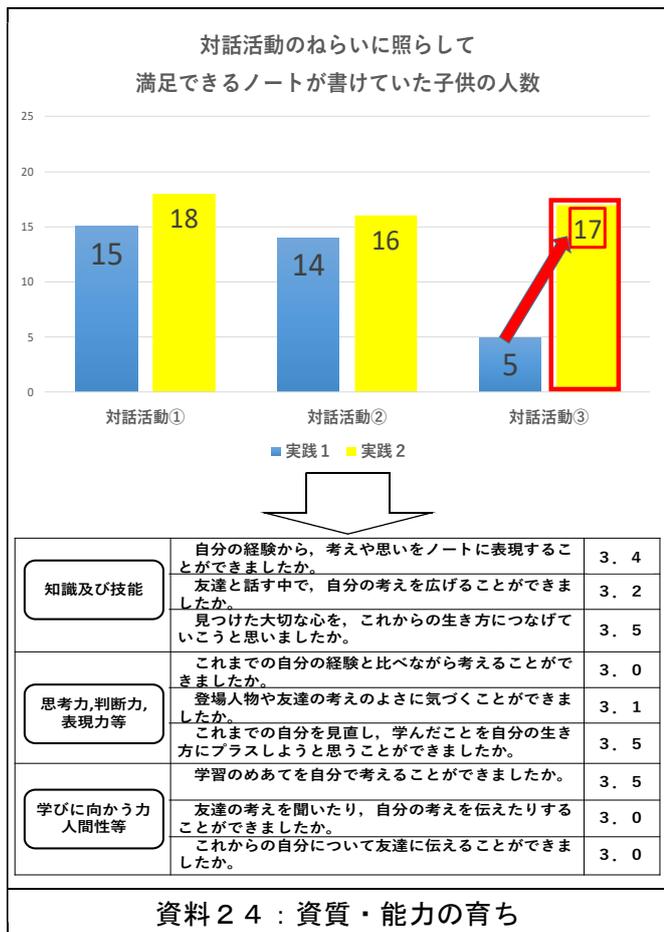
—— 思考力，判断力，表現力等：3.2 ——

自分なりの感じ方・考え方を見直したり新たにしたりする過程を3段階で構成し，各段階に「自分と比較，統合する対話活動」を位置付けたことにより，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方について考えを深めることにつながった。

—— 学びに向かう力・人間性等：3.1 ——

各段階に位置付けた「自分と比較，統合する対話活動」によって，自己の生き方を考え，主体的な判断の下に行動し，自立した人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性につながった。

以上の子供の育ちから，「自分と比較，統合する対話活動の連続」を具体化して，「これまでの自分」「ありうる自分」「ありたい自分」という追求を積み上げたことは，自己の生き方と向き合い続ける子供を育てる上で有効であり，道徳的な見方・考え方を働かせる指導の一方途を明らかにすることができたと考える。



## ② 研究の具体的な構想（授業づくりの構想の視点1, 2, 3）の有効性について

### ア 子供の感じ方・考え方の傾向を把握する手法の具体化することの有効性

手法の具体化で重視したことは、各学年における価値内容の系統性、子供の価値内容に対する実態を踏まえて、ねらいを設定したことである。

このことにより、「これまでの自分」「ありうる自分」「ありたい自分」について思考する姿を見通して、発問や表現活動を具体化することができた。

### イ 対話活動を位置付けた学習過程の最適化することの有効性

学習過程の最適化で重視したことは、「自分と比較、統合する対話活動の連続」（対話活動①→対話活動②→対話活動③）を位置付けたことである。さらに、実践1での課題を踏まえ、実践2では「あたためる段階」において、事前アンケートを根拠として、よりよい生き方に思いを向ける対話活動③やノート仕組み③と言語的表現活動を具体的な支援の重点として取り組んだ。

このことにより、問題意識をもち、多様な考え方を基に道徳的価値について考え、よりよい生き方に思いを向ける姿が見られた。

### ウ 感じ方・考え方の自覚を促す表現活動の工夫と支援することの有効性

工夫と支援で重視したことは、学習ノートを三つの仕組みに沿って活用し、「これまでの自分」の感じ方・考え方を自覚し、「ありうる自分」の感じ方や考え方を多面化し、よりよい生き方に必要な感じ方や考え方を大切にしたい「ありたい自分」を展望させることができた。

このような具体的な支援の有効性は、以下のような反応が多かったことから明かである。

- ・これまでの自分のよさや足りなかったところがよく分かりました。
- ・主人公や友達の考えから、今までの自分にはなかった考えを知ることができました。
- ・授業で見つけた大切なことを、これからの自分に生かしていきたいと思いました。

以上のことから、子供の感じ方・考え方の傾向を把握する手法の具体化、対話活動を位置付けた学習過程の最適化、感じ方・考え方の自覚を促す表現活動の工夫と支援は、「自分と比較、統合する対話活動の連続」を機能させる上で有効であったと考える。

## （2） 今後の課題

自己の生き方と向き合い続ける子供を育てる指導を充実・発展させるために、本研究を以下の視点から改善していくことが必要であると考えます。

- [改善点1] … 「ありうる自分」をさらに高めるために、子供が価値理解した上で、新たな揺さぶる発問や切り返しの発問を行い、自己内対話を活性化させること。
- [改善点2] … 「ありたい自分」について、キーワードに迫る実践している自分を想像させるだけでなく、地域の人や保護者など、身近に実践しているモデルと出会わせて考えさせること。

## ＜ 参 考 文 献 ＞

- ・文部科学省（2017）『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』
- ・赤堀博行（2018）『特別の教科道徳で大切なこと』：東洋館出版社
- ・永田繁雄（2017）『小学校新学習指導要領ポイント総整理』：東洋館出版社
- ・松永康史（2017）『「考え、議論する道徳」と対話的な学び』：桜花学園大学保育学部研究紀要
- ・浅見哲也（2018）『道徳科における「主体的、対話的で深い学び」の授業とは』：広島県道徳教育研究協議会